

先天盲ろうにおけるケースストーリー研究 I

—弱視ろうから全盲ろうとなった事例に対する長期的支援からの考察—

企画者・話題提供者
企画者・話題提供者
司会者
指定討論者
指定討論者

中村保和（群馬大学）
菅井裕行（宮城教育大学）
土谷良巳（東京家政学院大学）
岡澤慎一（宇都宮大学）
松田 直（高崎健康福祉大学）

KEY WORDS: 先天盲ろう、コミュニケーション、長期の実践研究、ケースストーリー

【企画趣旨】盲ろう者支援の最大の関心事は、かれらとのコミュニケーションを如何に行うかであり、そのためには周囲の人が通訳者となりながら周辺情報を提供することが不可欠であると認識されている。しかしながら、生まれながらに(または生後まもなく)視覚と聴覚の双方に障害を有する先天盲ろうの子どもたち(以下「CDB」と記す)には、通訳や情報保障という直接的対処では立ちゆかない深刻な困難が生じていることが知られている。具体的には、発達の初期段階においては、養育者や支援者との視線やしぐさ(または発声)の交わし合いが基盤となって生じる情動的結びつきに制約を受け、それによって周囲のものや人、出来事からの孤立が生まれ、コミュニケーションの育ちにおいて深刻な影響を受けることになる。さらに、こうした子どもたちは体系的な言語を獲得した以降も、他者との対話を展開していく上で困難を抱えていることが指摘されており、このことは同時にかれらが利用できる感覚に応じて、コミュニケーション上の特別な配慮や方法が必要とされることを示している。これまで筆者らは、CDB との係わり合いにおける実際のコミュニケーション場面の断片を共創コミュニケーション(co-creating communication)の観点から詳細にビデオ分析することを通して、CDB とのコミュニケーション上の課題に対する具体的方略とその様相を明らかにしてきた(2012年～2016年の全5回に渡る本学会自主シンポジウム)。同時に、これまでの報告に登場したCDBとは、長期の係わり合いを通して、かれらがその深刻な状態を下地としながらも、周囲の人々と係わり合うなかで、かれら特有のコミュニケーションを展開し、周囲のものや人と繋がり合う世界を構築し拡大していく経過を目にしてきており、かつその詳細な資料を蓄積させてきている。

そこで本シンポジウムでは、先天的に弱視ろうを併せ有し、青年期初期に視力を完全に失うことで全盲ろうとなった1事例に対する長期的支援を振り返るなかで、CDBへの個別具体的な支援経過を整理しつつ、かれらのコミュニケーションにおける育ちの足跡を描き、支援者の課題について考察する。なお、本研究の公表については保護者の了承を得ている。

【話題提供 1: 中村】 出会い当初、盲学校小学部(重複障害学級)6年生の女兒(以下、「S」と記す)。先天性風疹症候群により生後1か月時に視覚と聴覚の障害を指摘され、先天性白内障のため9か月時と12か月時に両眼水晶体摘出手術を受けている。視覚については左目は光覚、右目は矯正視力0.1である。聴覚については、聴性脳幹反応検査で90dB以上の感音難聴と診断されている(日常的に聴取反応は確認できない。補聴器装着せず)。Sは五十音式指文字と手話単語を組み合わせて両親や係わり手とコミュニケーション

を取る。日課や日常生活動作に関して係わり手が指文字や手話を用いてSの眼前30cm程度のところで発するとそれを視認して対応した行動を起こすことができる。Sからは特定の遊びの要求やスケジュールの確認について指文字と手話単語を組み合わせて事細かく発信してくる。本報告では、係わり手らがSの日常生活のなかでの興味・関心に寄り添って周辺情報を提供する通訳的役割を担いながら、同時に対話の相手となってSとのコミュニケーションを展開してきた約4年間の家庭訪問支援の経過について報告する。

【話題提供 2: 菅井】 Sは、高等部時期に完全に視力を失ったことで、それまで利用が検討されていた墨字をあきらめざるをえず、高等部3年の段階から点字の導入が図られた。盲学校卒業後、点字学習の継続のためにSは保護者とともに大学を訪れるようになり、ほぼ定期的に学習を続けてきた。学習の頻度が低いことと点字使用が今のところ大学での学習会だけであることから、学習の定着がまだ十分に図れていないが、学習の構えは形成されてきている。毎回の学習終了後には一緒に昼食をとり、保護者と生活上の課題をめぐって情報交換を行ってきた。さらに、Sが通う福祉サービス事業所(生活介護・就労継続支援 B)やレスパイト事業所へ行き、コンサルテーション活動も展開してきた。本報告では、これまでの点字学習の様子から、途中で全盲ろう状態になった場合の学習上の障害状況とその立ち直りを整理し、信号系活動からみた意義について考察する。加えて、Sを中心とする(centered)支援ネットワークの形成・促進の経過と、そこから示唆される長期的支援の課題について報告する。

【指定討論 1: 岡澤】 教育的係わり合いにおいてコミュニケーションの視点が重要なことは論を俟たない。コミュニケーションとは、要求や情報などの伝達にとどまらず、相手の興味や関心、さらには、“想い”や“願い”を共有するという側面を包含するものである。そして、この後者の側面は、対話性(dialogicality)の概念と密接に関係する。事例Sにおいてこれまで周囲との対話を重ねるなかで育み、現在の点字学習の継続のなかで育んでいるものは何か。

【指定討論 2: 松田】 CDBは、重度・重複障害児・者の中でもコミュニケーションをはじめとして全生活面で最も困難が鮮明に現れると考えられる。当然のことながら、基礎的な学習を一つ一つ積み重ねていく必要があるが、学校教育は18歳で終了となるケースがほとんどである。学習途上で学校教育の場から出されてしまう彼らの学習をいかにして継続できるようにするか、事例Sの実践経過は大いに示唆に富んでいる。

(NAKAMURA Yasukazu, SUGAI Hiroyuki, TSUCHIYA Yoshimi, OKAZAWA Shinichi, MATSUDA Tadashi)